

茶の湯文化学会会報 No.61

第61号/2009年6月19日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

云うまでもなく静岡県は、全国一の茶産地として知られ、全国の茶生産量の四十二%を占めている。また、全国のお茶の約七割は静岡県に集まるといわれるお茶の集散地でもある。県内には、お茶の生産や流通に関わる個人はもとより、各種団体や企業も多く、大学や国、県の研究機関でもお茶の研究が盛んに行われている。それらの関係者が加入する学術団体もいくつかあり、昭和二十二年設立の「日本茶業技術協会」は七百人余の会員を擁する。その他に、効能研究者を主とした「茶学術研究会」（昭和六十一年発足、会員数約二百五十名）、幅広い分野の研究者や茶愛好家により組織されている「茶学の会」（平成十年発足、会員数約百三十名）、お茶の水に関心を持つ人たちで作られた「静岡県お茶と水研究会」（平成六年発足、会員数約七十名）など、学問的な活動も盛んである。しかし、茶の湯文化学会の会員は、現在、全会員の三%程度に過ぎず、上記の会が、それぞれ静岡県の会員によって多く占められているのに比べ、いかにもアンバランスである。静岡県でも茶の文化という言葉はよく聞かれる。農家が集まる茶生産者大会でも「茶の文化を育てよう」といったスローガンが掲げられたりする。今は

もうないが、かつて、静岡県茶文化振興協会という会が組織され、機関誌も刊行されていた。では、静岡県では何を意識して茶の文化と言っているのだろうか。何年前かに、お茶の郷博物館（島田市）において、本会と共催で「茶の文化とは何か」というまさに直接的なシンポジウムを開催したことがある。「文化とは何か」に始まって、田中秀隆氏、中村羊一郎氏、倉澤行洋会長にもお出ましいいただいた。さらに、台湾で新しい茶文化の構築にかかわった范增平氏も招聘した。簡単に答えの出るようなテーマではなかったが、多様な考えがあることを提起しえたと思っている。この時もそうであったが、静岡県でこのようなお茶の文化に関する会を開くと、大部分の参加者は男性であり、茶の湯とは必ずしも近い人々ではない。もちろん静岡県でも茶の湯は盛んで、大規模な茶会も開催され、県知事自らお茶会に参加することも再三である。また、新聞社主催の茶道講座も長く継続されている。しかし、一般の茶に関する研究会や講演会で茶の湯関係者の姿が少ないのはなぜなのか。四年ほど前、本会にもお手伝いいただき、茶業者には茶の湯を、茶の湯者にはお茶の生産現場を知ってもらうため、「茶業と茶の湯」と

静岡例会開催にあたって

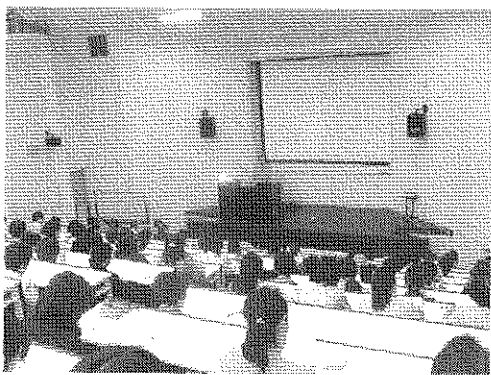
小泊重洋

題した二日ばかりのシンポジウムを開いたことがある。しかし、茶の湯関係者の参加は必ずしも多いものではなかった。静岡県では、お茶に関心のある人は他県に比べてはるかに多いはずである。茶を単に生業の手段としてだけでなく、その精神文化にももつと目を向けてもらいたいと考えている。

このたび、会員増強や茶の湯文化の普及を図るため、神谷副会長のご尽力もあって、いよいよ我が国の茶の中心地静岡県でも本会の例会が持たれる運びとなった。はたして、どのような反応が見られるか。そして、五月二十四日(日曜日)、浜松市の静岡文化芸術大学を会場に第一回例会が開かれ、谷 晃会長による「茶文化と茶の湯」と題する講演が行われた。予想をはるかに超え、約百名の参加者が会場が埋まった。さらに驚くことに、大部分が女性であり、和服姿のお茶の先生方であった。神谷副会長や地元会員のご尽力によるものであるが、新しい流れになることを期待したい。今後、本県の特性を生かし、文系と理系の癒合による総合学問としての茶の湯文化の展開も図りたいが、前述のような実情を考えると、ここ兩年は、茶の湯そのものを問うテーマを設定してみたい。男女半々、

和やかな会になることを期待している。

当分は、年三回の開催とし、浜松会場では名古屋に近いこともあり、神谷副会長に運営をお願いしている。本年第二回目は、八月二十二日(土)に、島田市お茶の郷博物館で中村利則氏による「遠州の茶室と庭」。三回目は、本年静岡県で開催される国民文化祭の応援事業に位置づけ、十月二十四日(土)に、「日本の茶文化」と題し、静岡文化芸術大学川勝平太学長による基調講演およびフォーラム「日本人にとって茶の湯とは何か」を予定している。県外からの参加も大歓迎である。



第一回静岡例会会場風景

理事 会

平成二十一年度第一回理事会は、五月十七日(土)午後二時から、池坊短期大学第二会議室で開催された。出席者は、会長・理事あわせて十二名、議題は以下の二題であった。

一、総会に提出する議案について

- ①平成二十一年度事業報告・決算報告
- ②平成二十一年度事業案・予算案
- ③役員改選

二、その他

一、①の事業報告では、大会、研究会、例会などについて各担当理事から実績報告があり、また神谷副会長から決算報告が説明され、これらについて承認がなされた。

一、②の事業案について、まず大会は、六月十三日(土)に京大会館で研究発表・総会・シンポジウム・懇親会を行い、翌十四日(日)に南禅寺界隈の庭園見学会を開催する案が示された。また研究会は、第二十八回が、九月二十一日(月)～二十四日(木)の日程で韓国での開催、第二十九回は、平成二十二年一月三十日(土)～三十一日(日)に広島での開催の案が示された。例会は、従来から行な

合いについて検討していくこととなった。最後に、会誌の査読に関して、その基本方針や具体的な方法について、今後改良するべき点としての意見が出された。

投 稿

山上宗二遺愛の虚堂墨蹟

— 達磨忌拈香語 —

京都、大徳寺所蔵の国宝、虚堂智愚墨蹟「達磨忌拈香語」は山上宗二終生愛蔵の掛軸だった。

虚堂墨蹟は、『山上宗二記』(以下「宗二記」)に七幅見え、筆頭に秀吉所持の生嶋虚堂、次に秀長所持の紅屋虚堂、ついで「達磨忌拈香語」が次のように記される。

一 虚堂

達磨七百年忌念香也、
宗二所持、

二八「年(『大徳寺』)、その七百年忌は南宋の紹定元年(一二二八)となる。しかし、『国宝』(文化庁『鑑査』、『国』)「虚堂智愚墨蹟 達磨忌拈香語」解説に「虚堂和尚が径山在任時代

達磨忌に際しての拈香(焼香)語」とあり、同書の他の虚堂和尚墨蹟解説には「咸淳三年(一二六七)径山第四十世となり、同五年八十五歳で示寂」と見える。仮に、径山第四十世となった咸淳三年のおりの拈香語とすると達磨大師没後、七百三十九年目に当たる。宗二は何に依拠して「達磨七百年忌拈香語」と記したろうか。

ところで宗二は、「達磨忌拈香語」をいつ入手し、どのように用いたろうか。宗二の虚堂墨蹟使用茶会は管見では五回あり、初見は天正九年(一五八一)九月、利休屋敷を借りて行った次の茶会である。

同九月三日 宗易にて、宗二興行

南宗和尚 海会和尚 宗及

一 小板 風炉
波ノ釜

一床ニ虚堂墨蹟、巻ナガラアリ、
此字、従大坂扇や宗二被取候、宗及つか
レ候、飯前ニ宗易かけられ候、(「宗及他會記」
「宗及他會記」所取)

宗二は入手した虚堂墨蹟を披露するのに一番に臨濟宗大徳寺派の長老、南宗和尚(春屋和尚カ)・海会和尚(白溪和尚カ)を迎えた。そして、自宅ではなく利休屋敷で行っており

かつ、自身では掛けず初座の床に巻いたままかざり、「会席」前に利休に掛けてもらっている。これは虚堂墨蹟尊重の顕われといえよう。この墨蹟は「達磨忌拈香語」ではなからうか。ちなみに翌十年九月、古溪和尚の信長百日忌法要に宗二は利休に従い、博多屋宗寿と共に施主となっている（水島福太郎『茶道文化』論集上巻玉甫和尚筆。『広限入室語』）。

(天正九年(一五八一)十月十二日朝) 山上 宗二会
宮内法印 宗及

一大ペラニ虚堂墨蹟(平)
一 炉四寸 小キ釜、五徳 野分茄子、茶ヲ入テ、

備前水指 唐茶碗(一宗及他會記『影印』(はじめり))
「從始カケテ」というのは初座から後座まで掛けられていたということで、宗二のこの墨蹟への思い入れがうかがえる。正客の宮内法印は信長の部将で堺の初代政所、宮内卿法印松井友閑。茶湯を好み名物も所持していた。

(天正十年) 霜月朔日朝 山上 宗二会
及 及
キダウ字、從始カケテ、壺ニ茶入テ、備前水下

久政を跡見に招待した。右記録はそのおりの「久政茶会記」である。久政は「達磨忌拈香語」と明記してはいないが「十五クタリ半、字数七十七」という法語の説明は現存の「達磨忌拈香語」に符合する。この墨蹟は『国宝』に写真図版が掲載され、その法語と解説が次のように記される。

〔法語〕
應一般若多羅之儼 嫩桂無差 破二流支 三藏之疑 詞鋒峻烈 從レ此六宗 欽レ影 正脉流通 一花五葉 滿地吹レ香 海豎山椒 咸霑二聖澤 一月良春小 莫莢五敷 炷ニ此兜婁 少伸二攀慕 且道大師還來也無 挿レ香云不審々々 堂虚 (朱印) (送り点は『国宝』による)。

虚堂智愚(咸淳五年(一二六九寂)は運庵普庵の法嗣で南浦紹明はこの法系を伝えた。

大徳寺の墨蹟は、虚堂和尚が径山在住時代、達磨忌に際しての拈香(焼香)の語で『虚堂録』(巻九)にみえている。書字雄渾、「破れ虚堂」とともに虚堂墨蹟中の雄編とすべきであろう。

と解説される。読み下し文と語釈を『虚堂和尚語録』(同前編字彙刊行会『国語編』(宗義書)第二編第七卷所収)により次に

炉ニ重釜、五徳ニ、備前水指 只天目、台なし、(本、天王寺墨會記『影印』(宗及他會記)所収)
宗及の叔父、天王寺屋津田道叱への虚堂墨蹟披露茶会である。この茶会でも茶会の最初から終りまで掛けられている。

天正十一年(一五八三)正月之茶湯
廿日晚 亭 宗二さつまや 客 道薫 宗易
一 深三疊 床なしの座敷なり、
一 しんの釜 竹自在いろいろ 一尺五寸ぬりぶち、

一 虚堂墨蹟大文字なり、まきながら座敷のすみによせかけて置、亭主出て所望 宗易かけられ候なり、

(以下、会席略) (道全集 卷の十二所収) 『茶』
正客の荒木道薫は名物を集めるなど茶湯を好み、秀吉に茶湯などに参仕した人物。床なし三疊茶室のため、巻軸を部屋隅に寄せかけておき「亭主(宗二)出て所望」をし、利休が掛けている。この所作も天正九年の茶会と同じく、墨蹟と利休に対する敬意の顕われといえる。

以上、宗二茶会に用いられた虚堂墨蹟は「達磨忌拈香語」と思われるが断定はできない。ところが、次に掲げる「久政茶会記」(松屋古典集 卷九卷『所収』)

掲げる。

「一般若多羅之儼に應じて、嫩桂差うこ」と無し、流支 三藏の疑を破つて、詞鋒峻烈なり、從れより六宗影を飲め、正脉流通す。一花五葉、滿地に香を吹く海豎山椒、咸く聖澤に沾ふ。月の良春の小、莫莢五敷す、此の兜婁を柱いて、少しく攀慕を伸ぶ。且道へ、大師還つて來るや也無や。」香を挿んで云く、不審不審。」(筆者注、「海豎山椒」は『国宝』に「海豎」(語釈)

流支三藏ニ菩提流支、此には覚希となづく、碧岩一の評に見ゆ。詞鋒ニ大辦才なり。六宗欽影ニ寶林録に見ゆ。正脉流通ニ見性法門。一花五葉ニ寶林録に見ゆ。海豎山椒ニ海中山上の謂なり、豎は貞なり、貞は中正の儀、椒は通じて樵と作す、やまのいただきを云う。咸霑聖澤ニ達磨のおもかけをこころむる。月良春小ニ月の良は統轄に見ゆ。春の小は冬日暖にして春の如し、これを小春という、十月なり、莫莢五敷ニ月の五日なり。兜婁ニ兜婁婆は鬼神国より出づ、香草と翻す、舊には白茅香という、此の方のなきところ。不審々々ニ或抄に云く、虚堂たしかに達磨

によつて宗二の「達磨忌拈香語」所持がはっきりする。

(天正十四年) 九月廿八日朝、未明
一 郡山曲音御屋敷ニテ、

宰相様江 堺山サツマヤ宗二御茶上ラ 大納言様ノ事也、
ル、

同廿八日、午刻、久政老人ニ御茶給ル、一尺七寸ノ炉、真ノフチ、コケ灰

自在、秘藏ノ釣物、輪口四寸ホド、立口四寸斗、
テツク、クワン、水四升アマリ入ヘシ、
圓座アリ、
カラカネコモリフタ
カマノハツル

虚堂墨蹟、横一間、ワキ三寸ツ、ホトアク、字大サ二寸五分程ツ、也、十五クタリ半、字数七十七、印ハナシ、上下茶、中アサキ、一文字ムラサキインキン、(上

(以下略) 部に釜・墨蹟のスケッチあり)

天正十四年(一五八六) 九月二十八日未明、
豊臣秀長に献茶した宗二は奈良の豪商、松屋

の応現をして、不審々々という、腕力なり、はいを目出度うさやうならおまめでなり。この香語、師の墨痕、日本に渡來し、大徳寺の什寶として伝へたり。

宗二が虚堂墨蹟を使用する三十年ほど前の天文十九年(一五五〇)二月、官王三郎は虚堂墨蹟を使用、津田宗達は「十六くだり在、五字ツ、十五くだり、奥四字アリ、合文字ノ数七十九在：印一ツ在：」と記している(『天王寺墨會記』、『影印本 天王寺墨會記』所収)。これは「達磨忌拈香語」ではなからうか。『国宝』写真図版の法語はまさしく五字ずつ十五行半(十六行)、字数は七十九字である。久政は「七十七字」「印ハナシ」と記すが最後の、「々々」を数えず、虚印は薄く小さいために見落とされたか。法語の全文を記憶するのは容易ではないためか久政に限らず、神屋宗堪の茶会記を除けば法語が記されるのはきわめて稀で、その意味となるとほとんど記されない。

ところで、酒井家本『山上宗二記』には表千家本には見えない次の一節がある。
外題虚堂和尚真蹟達磨忌拈香
大燈圓師御筆也。三好実休所持也。其後本願寺家中に渡り、今山上宗二所持ス。
意味は、「達磨忌拈香語」には「虚堂和尚

真蹟達磨忌拈香」と記される大灯国師筆の外題がある。三好実休から本願寺家中に渡り、現在は山上宗二が所持している、というのだろう。これが事実なら弘治二年（一五五六）十二月七日、三好実休茶会に使用の虚堂墨蹟（『宗及他會記』『天王寺墨蹟』）は「達磨忌拈香語」（『影印本』『天王寺墨蹟』所収）に「松屋名物集」（『茶室古典全集』）にといえよう。「松屋名物集」（『茶室古典全集』）に三好実休の虚堂墨蹟所持が記されているのも参考になる。

余談だが、「仙茶集」（『茶室全集』）に、
虚堂文字二幅 一幅ハ高野宗二、一幅ハ
豊州へ下候、

と見える。宗二は高野山に隠遁中も「達磨忌拈香語」を肌身から離さなかつたらしい。

「豊州へ下候」とみえる「豊州」は博多の宗寿を指し、この墨跡は「虚堂退院頌」である。博多宗寿は永禄五年・十一年・十三年に使用（『茶室他會記』『宗及他』）、ついで天正十年には堺の納屋了宇が用いており（『宗及他』）、『宗二記』に「虚堂退院之語也、堺戎之町」と記されるのは了宇をさすらしい。この墨跡は慶長四年三月、安国寺惠瓊が使用（『茶室日記』『影印本』）、のちに徳川將軍家に献上されるが明暦の大火に焼失した（『松屋名物集』『茶室古』）。

とができる。だが、『槐記』に「茶道口が下座」という考え方があり、大名なので点前座を上座にしたという解釈は妥当ではない。

最後に利休作とされる待庵について、中村昌生氏が指摘された「待庵が貴人と相伴者を迎えた場合を想定して作られた可能性」について紹介し、考察する（『待庵』平成五年）。

待庵は二畳の茶室だが、次の間との境が一枚換になつているため、江戸時代には待庵の用法について諸説が生まれた。その中で、最も説得力を持つのが『茶道望月集』（一七二三年）である。『望月集』は、待庵は通常は二畳が基本だとする。だが、極貴人が相伴者同伴の時だけ、特別な着座法（妙喜庵点前）をするという。この時、相伴者は次の間に座る。亭主は右手側に正客、左手側に相伴者を受けける形で、相伴者にも背中を見せない工夫をする。『望月集』の該当部分の翻刻は未発売のため、本発表でほぼ全文を紹介する。待庵でいかなる工夫が考えられたのか。茶室構成に照らして説得力がある当資料の価値について、皆様に広くご教示を仰ぎたい。

墨蹟の鑑賞について『宗二記』に、「墨跡ハ第一ハ祖師、第二ハ語、其外ハ様子次第ニ數寄入、代モ仕ル者也」と記されることについて次のように論評される。

『宗二記』は別称を『茶器名物集』といわれるように、墨跡も諸道具と同列に置いて論じたといえようが、必ずしも墨蹟を第一とはいっていないようである。やがて利休が茶禅一味の権化として推したのが、墨蹟が茶掛けの第一とされるにいたつた原因と考えられる（永島編太郎『茶道文化論集』上巻五二四・五二五頁）。

ところで、『松屋名物集』に虚堂墨蹟所持者数人が記される中に山上宗二の子息、伊勢屋道七がある。道七所持の虚堂墨蹟は「達磨忌拈香語」といえよう。この墨跡が大徳寺に渡つた経緯は「和歌山城主、桑山重晴より秀吉菩提のため、死の二日前に本寺に寄進された」（『大徳寺の名宝・墨蹟品目録』）という。すると伝来は、宮王三郎→三好実休→大坂扇や（本願寺家中力）→山上宗二→伊勢屋道七→桑山重晴→大徳寺、となる。ちなみに宗二は、桑山重晴（大永四年・慶長十一年・一六〇六）に『茶器名物集』（『山上宗二記』）を授けている。『松屋會記』は、宗二の「達磨忌拈香語」

（平成二十一年一月三十一日）

「墨蹟研究」

名児耶 明

墨蹟を茶席に掛けるようになったのは室町時代の末期からであるが、墨蹟登場以前は、中国絵画、水墨画であった。たとえば、『君台観左右帳記』という、室町幕府、將軍家の学芸員のような仕事をしていた能阿弥や相阿弥らが関わつた記録に墨蹟の記載がないこともそれを物語る。その理由は詳しくはわからないが、床に使われる掛物はすべてが唐物、すなわち中国のものであったことが、大きく影響していると思われる。墨蹟は唐物のはずなのになぜか床の間に使われてこなかった。それらも研究対象である。

現在でも墨蹟研究の基本の図書は、「本朝高僧傳上下」、「新訂図説墨蹟祖師傳」（今枝愛真）、江月宗玩の書いた「墨蹟之寫」（影印本とし「江月宗玩墨蹟之寫一禅林墨蹟鑑定目録一の研究」、昭和五一年）がある。特に「禅林墨蹟」正（昭和三〇年）・続（昭和四〇年）・拾遺（昭和五二年）（田山方南）がよく知られる。ところが今は、研究者そのものが不在となり、少しも進んでいないといえる。したがって、墨蹟の研究が進むようなきつ

所持を裏付ける唯一の貴重史料といえる。

補注

酒井家本（堺市博物館図録『堺家 茶の湯を創つた人びと』所収）「山上宗二記」には「天正十七年巳丑二月 宗二判／江雪齋参」

の奥書に続いて絵の替が記され、次に「虚堂墨蹟達磨忌七百年之拈香」の全文が記されるが、最後の一節は「香云不審云々」となっており、『国宝』の「挿、香云不審々々」と傍点の二字が異なる。



東京例会

（平成二十一年一月三十一日）
「貴人と相伴者（茶室編）」

岩田澄子

貴人と相伴者を同時に迎えた場面について、茶室の面から考察する。まず、貴人と相伴者を別室でもてなす選択肢もあることを確認した。また、床を座席として使用する事例として、神谷宗湛と杉木普斎の見解を考察した。次に、相伴席をもつ織部作の燕庵と、石州作の慈光院二畳台目をみる。慈光院茶室は亭主床で、二畳の次の間を相伴席として使うこ

かけを増やす必要が現在の課題である。

さらに、一般に言えることだが、これからの研究にあたってはできるだけ素直に作品に接するべきである。たとえば、墨蹟の筆は当時どのような物があり、どの大きさまで書くことが可能だったか、どんな筆であったか、墨は、どのようなものであったか、紙は中国製と和製の違いはどこにあるのか、どの大きさまで生産されていたのか、来朝しない中国僧が日本の紙に書くことがあるかといった普通に通にわき出る疑問を当時の状況を見直して考えることである。作者の印の真贋をする前に、筆者が自分の印を押すようになったのはいつのことなのかなど、先に確認しなければならぬことがあるはずである。出来るだけその時点でもっとも自然な状況をまず把握する必要があるだろう。そうしたさまざまな再検討を踏まえないと、普遍的な研究が進まないことだろう。

近畿例会

（平成二十年十一月二十五日）
「『仏日庵公物目録』の天目真跡と清拙正澄の墨蹟」

岩田澄子

中国由来の天目茶碗は、従来「鎌倉時代（南宋時代）」に、禅僧が中国浙江省にある天目山から持ち帰ったから天目という」とされてきた。だが、伝来当初から日本で天目と呼ばれていたのではない。中華五山にも入らない山が選ばれたのはなぜか（近年、西天目山窯での天目茶碗焼成が確認されたが、その生産量は極めて少量である）。

ヒントは、円覚寺塔頭・仏日庵の備品台帳である『仏日庵公物目録』にあると思われる。当資料には、飲器として建盞と湯盞はあるが、天目がないのである。その一方で、天目真跡と天目画賛があった。日本の禅寺で、天目が特定の飲器名となる前、ある一人の禅僧名として認識されていたといえるのではないか。『茶席墨宝祖伝考』等を検討した結果、その禅僧は、西天目山を拠点に元時代随一の活躍をした中峰明本と思われる。

なお、佐藤豊三氏は「天目と茶」（昭和五四年）で、文献で確認できる天目（盞）の初出年を建武二年に塗り替えられた。しかしそれと同時に、日本僧として初めて天目山へ上ったとされる遠溪祖雄について言及し、「天目」という新語には中峰明本が関係している」と指摘されていた。

本発表で紹介した『仏日庵』にある天目真跡と天目画賛の記述は、佐藤氏の仮説を補強するものと思われる。また、野口善敬氏の『元代禅宗史研究』（平成一七年）を参照して検討した結果は、当仮説を裏付ける客観的証拠になると思われた。

最後に、『仏日庵』が中峰明本のことを天目と記した理由について。清拙正澄の複数の墨蹟に「中峰正伝」なる印がみられる。しかし、清拙のいう「中峰」とは、中峰明本ではなく蜜庵のことであった。西尾賢隆氏のご教示によると、蜜庵の墓は天童山の中峰にあるという。『仏日庵』は、中峰明本と蜜庵の混同を避けるために天目と記したのかもしれない。

投稿論文の募集

学会事務局では投稿論文を募集しています。次号の第十七号（平成二十一年度版）に掲載予定です。

投稿論文のメ切りは八月末となっております。多数の投稿をお待ちしております。

なお、詳細につきましては学会事務局にお問い合わせ下さい。

例会のご案内

東京例会（会場 五島美術館講堂 午後二時）

日時 六月二十七日（土）

演題 「紹鴎緞子について」 吉岡 明美氏

演題 「未定」 木塚久仁子氏

日時 九月十九日（土）

演題 「根津美術館オープニング紹介」

多比羅菜美子氏

演題 「佐倉藩堀田家の茶道」 小倉 光夫氏

日時 十一月二十八日（土）

演題 「大東急記念文庫の名品から、創立六十周年展にちなんで」 村木 敬子氏

演題 「未定」 谷村 玲子氏

日時 二月二十七日（土）

演題 「未定」 中村 修也氏

演題 「未定」 福島 洋子氏

静岡例会

日時 八月二十二日（土）（会場 お茶の郷

博物館・島田市 午後一時半）

演題 「遠州の茶室と庭」 中村 利則氏

（終了後茶室の案内と説明）

日時 十月二十四日（土）（会場 掛川市・

美惑ホール 午後一時～四時半）

（第二十四回国民文化祭掛川市実行委

員会と共催 主題「日本の茶文化」）

基調講演 「茶の文化と文明（仮題）」

川勝 平太氏

フォーラム「日本人にとって茶の湯とは何か」

「禅茶録に見る茶の湯」 吉野白雲氏

「外国から見た茶の湯」

H. S. ヘンネマン氏

「日本人と茶の湯」 倉澤 行洋氏

司会 小泊 重洋氏

東海例会（会場 名古屋文化短期大学アセン

ブリ・ホール 午後六時）

日時 六月二十六日（金）

演題 「桃山の武将茶人・古田織部と上田

宗箇」

上田 宗岡氏

演題 「將軍秀忠の数奇の御成」 佐藤豊三氏

日時 九月二十五日（金）

演題 「鎌倉時代の茶道」 福島 金治氏

演題 「建盞と天目」 森 達也氏

日時 十一月二十七日（金）

演題 「天目の由来・中峰明本関係説と幻住

庵清規」

岩田 澄子氏

演題 「東山御物について」 志賀 太郎氏

第二回「茶文化を楽しむ」

日時 七月四日（土）（会場 ノリタケの森

午後二時）

内容 「アフタヌーンテイ」

クラフトセンター・ミュージアム

見学 ガイド落合氏

レストラン・キルンにてアフタヌー

ンテイ

北陸例会

日時 七月四日（土）午後二時）

（参加申込は六月末までに学会事務局ま

で）

見学会 江沼神社長流亭（石川県加賀市大聖

寺八間道五五・JR大聖寺駅から徒

歩十五分）

勉強会 「『数寄屋定法』について」

日向 進氏

（深田久弥 山の文化館・同市大聖

寺番場町一八一）

日時 三月二十七日（土）

見学会 未定

勉強会 未定

近畿例会

日時 七月十八日（土）（会場 茶道資料館

ホール 午後二時） 呈茶付き）

（会費は会員・一般ともに三百五十円）

演題 「茶の湯の中の文房具」 橘 倫子氏

演題 「煎茶と文房具」（仮題）大槻幹郎氏

日時 十月三日（土）（会場 伴市（素心

庵）鳥丸六角西入ル南側

電話075-221-3636 午後二時）

演題 「『南方録』「寛書」集雲庵物語に關

する一考察」（仮題） 杉谷朱美氏

演題 「久留米藩御庭焼 柳原焼について」

中村美穂氏

高知例会（会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

午前十時）

日時 六月二十八日（日）

演題 「茶の湯文化学会平成二十一年度大会

の研究発表をテーマとしたシンポジウム」

永吉溪滋氏・柏井武氏

茶事（正午～午後四時）

日時 九月六日（日）

演題 「茶の湯と陰陽五行」 永吉溪滋氏

日時 十二月十三日（日）

内容 「茶の湯関係文献を読み書評・所見発

表

茶事 (正午〜午後四時)

日時 二月七日(日)

内容 「未定」

このほか、一般の方々が茶の湯に親しんでもらうための茶席を、毎週日曜日を主体(十時〜十六時)に同所で設けます。

後記

前号でお知らせしました静岡例会の十月の会場の名称に誤りがありました。誠に申し訳ありませんでした。

誤 美観ホール
正 美感ホール

